

松岡勲の映画 or 読書案内 (8)

混迷する世界を根底的に批判する

ウクライナ出身の映画監督 セルゲイ・ロズニツァ

はじめに

ウクライナ戦争でウクライナの被害は増大する一方、何ら停戦に向けての解決は見えない。トランプ大統領が就任して、パレスチナのガザ地区の住民を集団移住させるという無茶苦茶な提案したり、移民やマイノリティへの痛みを感じない発言、施策が発動し始め、戦争の危機と世界の分断が進んでいる。

この原稿を書くにあたり、NHK スペシャル「ウクライナ大統領府 軍事侵攻・緊迫の72時間」(2023年2月26日放送)を見直した。2022年2月24日に始まったロシアのウクライナ侵攻の舞台裏に迫ったドキュメンタリーだ。このドキュメンタリーでは、ゼレンスキー大統領の側近たちがNHKの取材に応じ、ウクライナと世界の運命を変えた緊迫の72時間の舞台裏に迫っている。テレビドキュメンタリーとして傑作だ。

ウクライナ侵攻が始まった前後から、私が注目しているウクライナ出身(現在はドイツ、リトアニア等で制作している)の監督がいる。それがセルゲイ・ロズニツァだ。ロズニツァは1964年にベラルーシで生まれ、ウクライナのキエフで育つ。ウクライナの大学で数学修士資格を取得後、1987年より国立研究所で人工知能の研究をしていたが、1991年にモスクワの全ロシア映画大学へ進学し、映画監督への道を歩み始めた。その動機は、移り変わりの激しい時代を映画監督として生きたかったからだ、と、いたってシンプルだ。ロズニツァの作品はたくさんあるが、ここ数年の間に日本公開された作品を紹介する。

<「ドンバス」 2018 年制作>

「ドンバス」はロズニツァには珍しく劇映画だ。2014年に親ロシア派勢力による独立宣言を利用して、ウクライナ東部のドンバス地方に侵攻したロシア軍の支配実態を描いた。現在のウクライナ戦争はこの時点より始まった。そこでは、クライシスアクターと呼ばれる俳優たちが演技を行い、フェイクニュースが作られている。さらには、医師が支援物資を横取りしようとしたり、警察が新政府への協力という嘘をついて市民から資産を巻き上げようとしたりしている。一方、国境では両国による砲撃の応酬が続いていた。映画の中で「親ナチ」とされた老いた兵士が、収容先に移送される前に街角に晒される。若者から始まり、一般市民、孫を連れた老婦人までが兵士に「リンチ」を加える。現在のウクライナ戦争の実態がこの映画で先取りされて描かれていると感じた。



<「バビ・ヤール」 2021 年制作>

「バビ・ヤール」は、第2次世界大戦中、ウクライナのキーウにあるバビ・ヤール溪谷で起きたドイツ軍によるユダヤ人大虐殺を、ロズニツァの元来の手法であるアーカイブ映像を使ったドキュメンタリー作品だ。キーウに住むユダヤ人をはじめとする3万人以上の人々が、2日間で大量に殺害される事件が起きた。その背景を掘り下げた鋭い作品だった。すごいなと思ったのは、ヒトラーをスターリンからの「解放者」と捉えたウクライナ人がドイツ軍を歓迎する風景やユダヤ人を連行するドイツ軍に加担する姿を捉えていることだった。かなりきつい映画ではある。この作品でセルゲイ・ロズニツァは第74回カンヌ国際映画祭リュ・ドール審査員特別賞を受賞した。

<「ミスター・ランズベルギス」 2021 年制作>

「ミスター・ランズベルギス」はロズニツァ最高傑作だ。映画はソ連からのリトアニア独立を達成した指導者ランズベルギスとリトアニア国民の闘いをアーカイブフィルムとランズベルギスへのインタビューで構成する。実に4時間の映画であるが、あきさせない。前半はリトアニア独立までの国民運動の高まりとソ連との政治的駆け引きを描き、後半は独立を圧殺しようとするソ連の軍事侵攻とリトアニア国民の死をかけた戦いを描く。後半を見て、現在のロシアによるウクライナ侵攻とウクライナ国民の戦いと何ら変わらないと痛感した。

<「新生ロシア1991」 2015 年制作>

「新生ロシア1991」は1991年8月19日の「ソ連軍事クーデター」を描いている。ペレストロイカに反対する共産党保守派がゴルバチョフ大統領を軟禁し、軍事クーデターを宣言した。テレビはニュース速報の代わりにチャイコフスキーの「白鳥の湖」を全土に流し、モスクワで起きた緊急事態にレニングラードは困惑した市民で溢れかえった。自由を叫んだロックが鳴り響くレニングラードは解放区の様相を呈し、8万人が集まった宮殿広場でついに人々は共産党支配との決別を決意する。この作品はレニングラードの8名のカメラマンが混乱する市中に紛れ撮影した映像をセルゲイ・ロズニツァが入手、編集した。「ソ連8月クーデター」に揺れながらもロシアの自由のため立ち上がったレニングラード市民の姿を再構成したものだ。私の学生時代は1962年以降の中ソ論争が激しい時代で、フルシチョフのスターリン批判が始まっていた時代だった。そんな時代に政治形成をしたので、この映画の描く社会主義からの転換、資本主義の復活、ロシア帝國的な過去の復活などを複雑な思いで見た。この映画を見て、ズヴェトラナ・アレクシエーヴィッチがソ連崩壊後のロシアを描いた『セカンドハンドの時代

「赤い国」を生きた人びと』(岩波書店)を今年こそ読まねばと思ったが、まだ実現していない。

＜「キエフ裁判」 2022 年制作＞

「キエフ裁判」は、1946年1月にキエフで、ナチス関係者15名が人道に反する罪で裁判にかけられた国際軍事裁判である。(裁く側は当時のソ連)、第二次世界大戦中のキエフでのユダヤ人虐殺を描いた同監督の「バビ・ヤール」の続編だ。ロズニツァのドキュメンタリー映画の「アーカイブ映像」の再構成がますます秀逸だった。最後のドイツ人戦犯の絞首刑の「公開処刑」と熱狂する群衆の「どよめき」の場面が衝撃的だった。

＜「破壊の自然史」 2022 年制作＞

「破壊の自然史」は連合国軍のドイツ空襲のドキュメンタリー映画だ。第二次世界大戦末期、連合軍はイギリス空爆の報復として敵国ナチ・ドイツへ「絨毯爆撃」を行った。連合軍の「戦略爆撃調査報告書」によるとイギリス空軍だけで40万の爆撃機がドイツの131都市に100万トンの爆弾を投下

し、350万軒の住居が破壊され、60万人近くの一般市民が犠牲となった。当時のアーカイブ映像を再構成した画面はその圧倒的な破壊力と死屍累々のドイツ諸都市の姿を映し出す。戦争中のアメリカ軍の日本諸都市への空襲と現在のウクライナへのロシアのミサイル攻撃や侵攻を思い起こさせた。

おわりに

日本では、「ドンバス」公開の以前にロズニツァのソ連時代の『国葬』などのドキュメンタリー作品が「群衆」三部作として公開された。残念ながらこの情報知った時には、もう公開が終わっていて、見ていない。ロズニツァの作品はDVD化されているので、ぜひ見たい。

・「国葬」2019年 ・「粛清裁判」2018年 ・「アウステルリッツ」2016年

ロズニツァの作品が日本公開された最後が2023年公開の「破壊の自然史」だ。その後、ロズニツァの映画制作が進んでいるのかどうか気になる。ぜひ続編を見たく、期待している。